

『早池峰』と私 2018年5月 9期・鈴木

七十を越える歳になると、未来への道は霞み、過去ったものを追憶する傾向にあるようだ。

私は終戦の約1か月前に疎開地の遠野で生まれた。戸籍には「岩手県上閉伊郡遠野町」と記載されている。

終戦を迎え落ち着いた頃、東京・鷺ノ宮に寄寓し、3歳のとき、焼野原の池袋に引越し、就職するまでそこに住んだ。

1997年に福島県喜多方市に社用で2年間単身赴任したとき、1998年7月に憧れの早池峰をひとり登山した。



1998年テント持参で『早池峰』ひとり登山し、「川原の坊」にてデッサン

自分の『山日記』No. 59を紹介する。

- ・年月日：1998年（平成10年）7月18日（土）～19日（日）
- ・地 図：北上山地 早池峰
- ・個人記録：日本百名山 58座目、山日記ピーク148座目、
登山ピーク209座目
- ・形 態：テント・スケッチ帖持参、ひとり登山、単身赴任先から移動

・行程：

★7月18日(土)快晴

喜多方10:23=10:41会津若松10:51=12:00郡山
12:27=(やまびこ107号)=14:18新花巻15:25=(バス)
=16:48川原の坊—2:30—テント泊

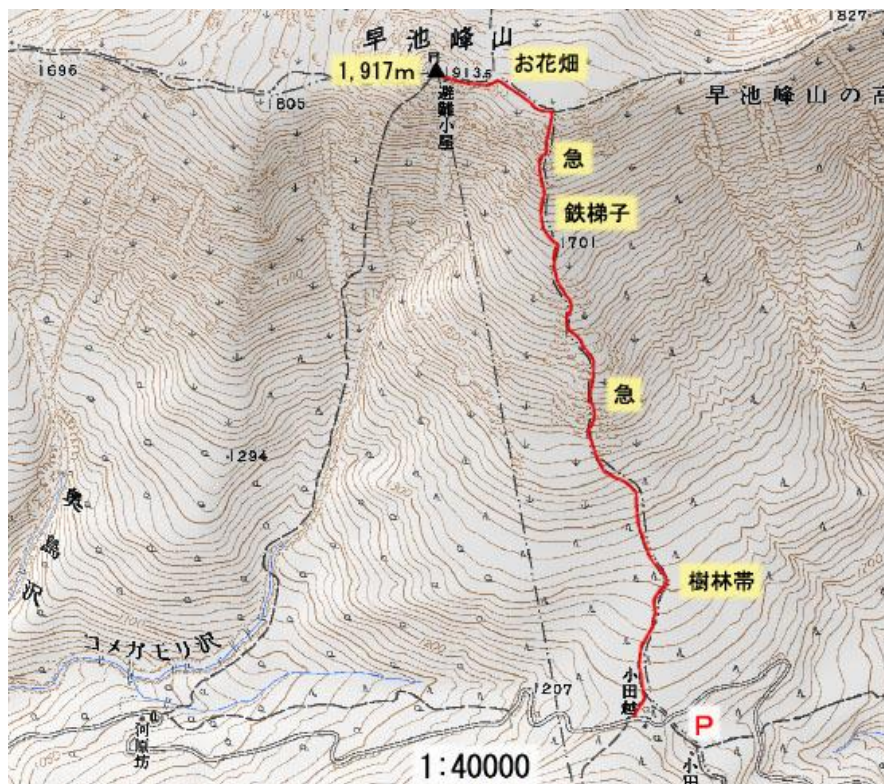
★7月19日(日)快晴、12℃→日中25℃

テント場5:50—6:20小田越6:20—8:10早池峰(1914M)
9:15—10:20川原の坊11:30=(バス)=12:47新花巻13:
03=14:55郡山15:08=16:28会津若松17:02=17:
17喜多方

本来私は雨男なのに、今回は二日間快晴に恵まれた。

今年の夏は梅雨明けが未だで、北の高気圧が強いのか南の高気圧が弱いのか
いまだに梅雨前線が横断している。小生も早やこの7月で53歳になった。

生れ故郷の遠野に近く、柳田國男の遠野物語にもよく出てくる早池峰、よう
やく登るチャンスを天は与えてくれたようだ。



柳田國男著『遠野物語』岩波文庫1976年によれば、

一 遠野郷は今の陸中上閉伊郡の西の半分、山々にて取り囲まれたる平地なり。

新町村にては、遠野、土淵、附馬牛、松崎、青笹、上郷、小友、綾織、鱒沢、宮守、達會部の一町十々村に分かつ。近代或いは西閉伊郡とも称し、中古にはまた遠野保とも呼べり。今日郡役所のある遠野町すなわち一郷の町場にして、南部家一万石の城下なり。城を横田城ともいう。この地へ行くには花巻の停車場にて汽車を下り、北上川を渡り、その川の支流猿ヶ石川の溪を伝いて、東の方へ入ること十三里、遠野の町に至る。山奥には珍しき繁華の地なり。伝えいう、遠野郷の地大昔はすべて一円の湖水なりしに、その水猿ヶ石川となりて人界に流れ出でしより、自然にかくのごとき邑落をなせりしと。されば谷川のこの猿ヶ石に落合うもの甚だ多く、俗に七内八崎ありと称す。内は沢または谷のことにて、奥州の地名には多くあり。

○遠野郷のト一は元アイヌ語の湖という語より出でたるなるべし、ナイモアイヌ語なり。

- 二 遠野の町は南北の川の落合にあり。以前は七七十里とて、七つの溪谷おのおの七十里の奥より売買の貨物を聚め、その市の日は馬千匹、人千人の賑わいさなりき。四方の山々の中に最も秀でたるを早池峰という、北の方附馬牛の奥にあり。東の方には六角牛山立てり。石神という山は附馬牛と達會部との間にありて、その高さ前の二つよりも劣れり。大昔に女神あり、三人の娘を伴いてこの高原に来たり、今の来内村の伊豆権現の社あるところに宿りし夜、今夜よき夢を見たらん娘によき山を与うべしと母の神の語りて寝たりしに、夜深く天より嶺華降りて姉の胸の上に止りしを、末の娘眼覚めて窃にこれを取り、わが胸の上に載せたりしかば、ついに最も美しき早池峰の山を得、姉たちは六角牛と石神とを得たり。若き三人の女神おのおの三の山に住し今もこれを領したもう故に、遠野の女どもはその嫉を畏れて今もこの山には遊ばずといえり。

深田久弥著『日本百名山』 14 早池峰によれば

早池峰は東北では鳥海、岩手、月山につぐ高峰でありながら、案外世に知られないのは、僻遠の地にあるためであろう。早池峰という響きのいい名前、この山は早くから私の胸にありながら、その姿を撮った写真を見たことがなかった。盛岡の平野から遙かに見えないわけではないが、それは撮影にはあまりにも遠すぎる。また山の近くまで来るとその全容を美しく捕えることが出来ない。

谷文晁の『日本名山図会』には太平洋側から見た早池峰が描かれている。多分宮古あたりの港とおぼしき風景を前にして、まるで拳をあげたような突兀とした山に描かれている。宮古湾から早池峰までは相当の距離がある。

絵に誇張のあるのは承知していても、こんなにあざやかに大きく見えるのであろうか。



私が一番ハッキリと早池峰の全容を眺めたのは姫神山の頂上からであった。それは北上高地の山波の上に一際高く立っていた。尖鋭な独立峰の形ではなく、長い頂稜を持つ重厚な山の姿で立っていた。『遠野物語』には「四方の山々の中に最も秀でたるを早池峰と言う。北の方附馬牛の奥に在り」とあるが、あるいはこの山を一番古くから親しく眺めていたのは、遠野の人々だったかも知れない。附馬牛には早池峰神社があり、そこから前面に薬師山を眺め、その背後に早池峰を望み、猿石川に沿うて、風景の美しい所として知られている。古い登山路はそこから二里二十町としてある。

私が早池峰の霧の中の山頂に立った時には、そこに古びたお宮があって、その前の崩れた石の灯籠に「奉納御宝前」と刻まれ、裏側に微かに「安永九年六月吉日」という字が読まれたが、それは遠野から献納されたものであったろうか。

『遠野物語』は私の愛読書である。柳田國男氏が遠野の人佐々木鏡石氏から聞かれた山村の古い話を編されたものである。遠野郷は「花巻より十余里の路上には町場三カ所あり。其他は唯青き山と原野なり。人煙の稀少なること北海道石狩の平野よりも甚だし」と明治の末に柳田氏も記されているが、今はそれよりも開けたにしても、やはり僻遠の地であることは免れない。

ある秋の夜、私は盛岡の東郊の丘の上に立った。前面には華やかなネオンサインの街が広がっていたが、背後を向くと全くの暗闇で一点の灯も見えない。「日本のチベットと言われる所以ですよ」と案内の人が言ったが、その暗闇の奥の広大な地域こそ、北上高地と呼ばれる人煙疎らな地であった。その高地の中の最高峰が早池峰である。

『遠野物語』には早池峰がしばしば現れる。大昔に女神があって、三人

の娘を連れてこの高原へ来、とある村の社に宿った。母の神はその夜、よい夢を見た娘により山を与えようと約して眠ったところ、夜半に天から嶺華が降って姉の姫の胸に留った。すると末の娘がひそかに眼ざめてこれを取り、自分の胸の上に載せた。そこで一番美しい早池峰を得、姉たちは六角牛山と石神山とを得た。六角牛山は旧遠野町の東にあり、石神（石上）山は西北にある。

またこんな話もある。ある村人が早池峰へ竹を刈りに行くと、地竹がおびただしく茂っている中に、大の男が一人寝ていた。見ると、地竹で編んだ三尺ばかりの草履が脱いである。仰向けに寝て大きな鼾をかいていたという。その他、大きな坊主に化かされた話や、眼の光のおそろしい大男に出会った話や、いずれも妖怪変化じみた物語で、この山がいかに普通の世間から遠ざかっていたかが察しられる。

現在、普通に採られる登山道は、花巻から岳川に沿って遡り、最奥の岳部落から登るものと、北側を通じる山田線（盛岡一釜石）の一寒駅平津戸から御山川に沿って登るものがある。前者を表口と見なしていいだろう、というのは、岳部落にも早池峰神社があって、そこが登山口となっているからである。

私は表口を採った。岳は二十戸ほどの山村で、頼めばどこの家でも泊めてもらえる。ここに昔から伝わっている獅子舞は、無形文化財に指定されるほど由緒あるもので、私の泊まった農家の座敷の床の間には、大きな獅子頭が三つ並べて飾ってあった。

岳の早池峰神社は格別立派というわけではないが、杉林の参道を持った静かな環境にあった。伝えによれば、大同十年（807年）二人の獵師が奇鹿を追って早池峰の山頂に登ったところ、金色の光が射し、権現の靈容を拝した。そこで下山して一社を建て、姫大神とあがめたのが今の神社だという。そこに小さな軸仕立のお札を売っていたが、それには明らかに女神と思われる像が刷ってあった。

登山路は岳から川に沿って六軒ほど上った河原ノ坊から始まる。昔、快賢という僧が早池峰の詣で、ここに一寺を建てて河原ノ坊と呼んだ。その後洪水で寺は流失して名前だけが跡をとどめている。すぐ横の谷川は昔の登拝者が垢離場と称して身を清めた所だという。北上の詩人宮沢賢治にここをうたった詩がある。その一部――

ここは河原の坊だけれども
曾つてはここに棲んでゐた坊さんは
真言か天台かわからない
とにかく昔は谷がも少しこっちへ寄って
あゝいふ崖もあったのだらう
鳥がしきりに啼いてゐる

もう登らう

そこから距離は短いが一途の急な登りであった。垢離頭と呼ぶ所が水の最後で、そこで沢を離れて尾根登りになる。もうそのあたりは草本帯で、八月終りの咲き残りの高山植物が匍松の間を色どっていた。

それから岩石地帯にさしかかる。巨岩がゴロゴロ転っていて、特別の形をしたものには呉座走岩だの打石だのという名がついている。ハヤチネウスユキソウをあちこちに見出したのはそのへんであった。普通のウスユキソウよりは大ぶりで、日本に産するものの中では、欧州アルプスのエーデルワイスに一番近いという。早池峰の特産である。

頭上に城塞のような巨岩が立ち並んでいる所まで達すると、もう頂上は近かった。岩の間を攀じて山頂に立つと、ただほうぜんと乳色の霧が吹きすぎるばかり。ちょっとの晴れ間に、眼の下に気持のよさそうな原の広がっているのが見えたが、それもすぐに閉ざされて、いくら待っても二度と晴れなかった。

私は反対側の平津戸の方へ下る予定をやめて、元の道を岳へ引返した。岳へ着くといつか空が晴れて、遠く水上に早池峰が美しく姿を現していた。